

[書評]

佐々木滋子著

『祝祭としての文学 マラルメと第三共和制』

水声社、2012年

坂巻 康司

19世紀後半のフランス象徴主義を代表する詩人ステファヌ・マラルメ（1842-1898年）については日本でも長年に亘り多くの研究が積み重ねられてきた。一昨年、筑摩書房版『マラルメ全集』全五巻が20年越しで完結した他、若手研究者による注目すべき著作も続々と出版されるなど、マラルメ研究の気運は再び高まっている。そのような中、ベテランの仏文学者である佐々木滋子氏による『祝祭としての文学 マラルメと第三共和制』が水声社から刊行された。

佐々木氏はすでに『「イジチュール」あるいは夜の詩学』という浩瀚な研究書を同じく水声社から上梓しているが（1995年）、それはマラルメの未完の散文詩「イジチュール」を徹底的に言語学的な観点から分析するという内容のものであった。それに対して本書は、第三共和制という19世紀末のフランス社会・政治体制の中にマラルメの後期散文作品を置き直し、この詩人がその時代といかに対決しようとしたのかを丹念に分析した研究書と言うことが出来よう。マラルメの後期散文は、一見、演劇やバレエなどの舞台芸術批評の様相を呈しているものの、その実、表象の問題、政治・経済の問題、文学の存在意義、宗教の意義など、多種多様かつ複雑な問題に切り込もうとした極めて難解な散文である。その全貌を本格的に明らかにした研究はいまだ世界に存在していないと言えるが、佐々木氏はそのような困難な課題に単身立ち向かおうとしている。

もちろん、そのような試みが簡単になされるわけではないのだが、佐々木氏はマラルメの散文の片言隻句もゆるがせにせず、「祝祭」という概念を手がかりにしつつ、その言葉が那邊を目指して書かれているのかを可能な限り明らかにしようとしている。その周到かつ粘り強い読解作業は読む者を圧倒するほどの力を持っている



る。氏は極端な思考の飛躍を要求する過去の研究に疑念を呈し（例えば、哲学者のラクー＝ラバルトやランシエールの論）、自らにはそのようなアクロバットな読み方を禁じ、あくまでも誠実にマラルメの思想の核心に迫ろうとしている。いずれの章も興味深いのが、特に第5章「マラルメの文芸共和国」は「庇護」という散文の読解作業を通して、マラルメにおける「文学」理念を剔抉した秀逸なる研究であると感じられた。

演劇研究者の目からすれば、当時の演劇状況についての調査がこの本では不十分に思えるかもしれない。しかし、佐々木氏のマラルメ読解は恐らくまだ終わっていない。『祝祭としての文学』は今後、氏が更なる深い読みの成果を提示してくれることを予告する書物なのであろう。

Patrick Besnier 著

『Alfred Jarry』

Fayard, 2005

齋藤 公一

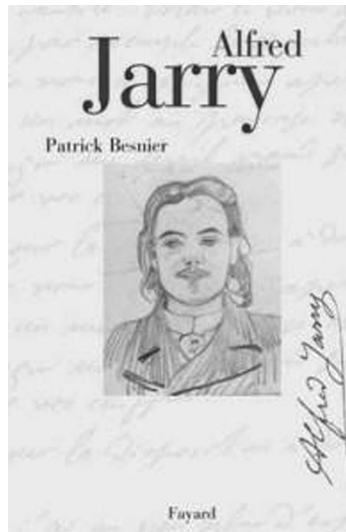
ジャリ（1873-1907）の評伝にはすでに1974年刊行のNoël Arnaud『Alfred Jarry d'Ubu Roi au Docteur Faustroll』（2003年水声社から相磯佳正氏による翻訳が出版されている）があるが、これはジャリの1892年から98年までの評伝で、アルノーは下巻を書くはずであったが、残念ながら2003年に亡くなってしまった。ベスニエはアルノーが集めた資料を始め、書簡やジャリの書いた時評なども参照し、ユビュ王という仮面の下に紛れがちなジャリの全体像を、生誕前から亡くなるまで虚実を整理しながら提示している。

アルノーはジャリの友人・知人の証言をもとに、ジャリのエピソードに満ちた生活を読みやすく時間の流れに沿って記述していた。ベスニエは前後関係や時期などを考慮に入れて証言の信憑性を分析、判断し、アルノーの資料も検討、補足、訂正したうえで取り上げて、『ユビュ王』上演以降に「ユビュ神話」を背負ってしまった従来の虚像を解体すべく、アルノー以降発見された参照し得る書簡や資料をも渉猟してジャリの実像を浮かび上がらせようとしている。結果的にはユビュの呪縛を解きながらも、新たに「ジャリという神話」を構成してしまっているように思われる。その一方で、象徴主義から脱却しようとし、『ユビュ王』によって独自の演劇を展開しようとするジャリの、生涯にわたる、とりわけ演劇的な生きざまに焦点が当てられ、詩、小説を書きながらも人形劇

やオペレッタの台本製作に執着するジャリが、まさに「演劇の人」であったことが明らかにされてもいる。

評伝という形式のためか、ベスニエはジャリの作品、演劇観、世界観（パタフィジック）に関して深く考察してはいるが、700ページあまりの大部の本書は、少年時代から死ぬまでの身辺雑記も含めて、「ジャリという神話」の生まれる素地を掘り起こした優れた評伝とは言えよう。2010年6月3日から7月20日までコメディ＝フランセーズはジャン＝ピエール・ヴァンサン

の演出で『ユビュ王』を上演し、機関誌 *Les Nouveaux Cahiers* 5号でジャリを特集している。この著作は2005年の刊行であるが、『ユビュ王』をコメディ＝フランセーズがレパートリーに入れたことを考えると、時宜にかなったものなのかもしれない。



鈴木晶編・著
『バレエとダンスの歴史』

平凡社、2012年

高橋 信良

フランスのバレエ史については『バレエの歴史 フランス・バレエ史——宮廷バレエから20世紀まで』（佐々木涼子、学習研究社、2008）が記憶に新しい。また、17世紀フランスの宮廷バレエに関しては『宮廷バレエとバロック劇』（伊藤洋、早稲田大学出版部、2004）が、19世紀バレエ・ロマンティックの台本分析では『十九世紀フランス・バレエの台本』（平林正司、慶應義塾大学出版会、2000）が非常に詳細な研究として基本図書となるであろう。その一方で、舞台上の身体表現はジャンルを超え、国境を越え、さまざまな試みが繰り返され、その定義づけは簡単なものではなくなっている。とりわけ、バレエ・リュス以降の現代バレエ、モダン・ダンス、コンテンポラリー・ダンスなどの現代舞踊とパフォーマンス・アーツの関わり方など、容易く理解できるも

のではない。

そんな状況を打破すべく、身体表象の最前線の研究者たち10人がそれぞれの専門分野をわかりやすく解説したのが、『バレエとダンスの歴史』である。表題どおり、バレエの起源からコンテンポラリー・ダンスの最前線まで通史的に解説したものであるが、とかく各論に終始しがちな解説集ではなく、通時的な流れと共時的な諸関係が網の目のように関連づけられ、非常にわかりやすい。編著者が言うように、一冊の本で「舞踊一般」を網羅的に解説することは不可能であり、したがって、同書は解説の範囲を「劇場舞踊」に限定されたものであるが、まずはそれで充分、というよりも、ヨーロッパの舞踊史を曖昧に知っていることで、理解したと思いつているような私にとっては、非常にありがたい文献である。特に日本における西洋現代ダンス研究の分野では、人物名のカタカナ表記すら統一が出来ていない状況で、たとえば、同書の表紙にもなっているローザスのドゥ・ケールスマーケルはドゥ・ケースマイケルやケースマイケルという風に表記もまちまちで、どこまでが名字かも不確定な状態である。そこで、同書を手がかりとして、今後、現代ダンス辞典など、用語の統一が行われ、この分野に興味を持つ人がひとりでも多く出てきてくれることを願う。

